

守 岡 遺 跡

昭和50・51年度発掘調査概報

1979

大分市教育委員会

序 文

守岡遺跡の緊急発掘調査は、大分市の人口急増に対応して建設することとなった大分市立森岡小学校の用地を発掘調査したものです。この地は、弥生式土器散布地とし周知されたところであり、それゆえ、事前に建設予定地全面の試掘調査を実施し、遺跡の発見されなかった地区に校舎を配することとしました。

しかし運動場予定地に遺跡がかかるのは不可避となったため、緊急発掘調査をおこなうことになったものです。

調査の結果、予想以上の成果をみたために、運動場は「全面盛土工法」を実施することにしました。遺跡保存のてだてとして十分なものとは言えませんが、学校建設と遺跡保存という困難な問題解決の一つの事例にはなり得たと思っています。

なお本調査については、地元の方はもちろん、指導を願った諸先生方および大分県教委その他多くの方々に、心から謝意を表する次第であります。

昭和54年3月

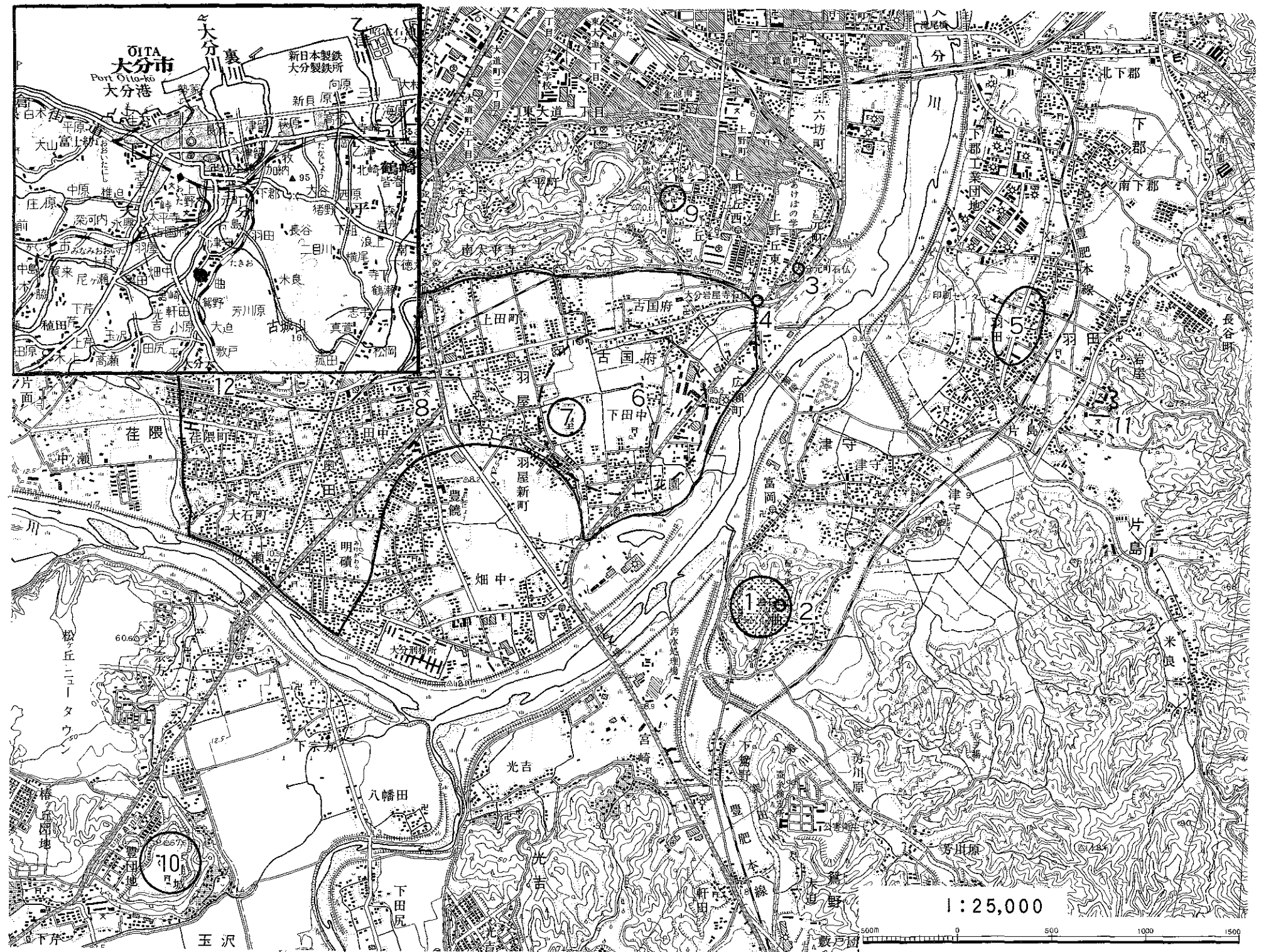
大分市教育委員会
教育長 松本喜義

目 次

序 文	1
Ⅰ 遺跡の環境および調査概況	2
1. 遺跡の立地と環境	2
2. 調査にいたる経過および遺跡の概要	2
Ⅱ 弥生式土器・古式土師器を伴う遺構	4
1 住居跡	4
A Ⅰ区	5
(1) 10号住居跡	5
(2) 17-A号住居跡	6
(3) 19号住居跡	7
B Ⅱ区	9
(4) 1号住居跡	9
(5) 16号住居跡	9
(6) 3号住居跡	10
2 堅穴遺構	11
3 住居跡内の焼土塊等について	12
Ⅲ 中世遺構	13
(1) 掘立柱建物跡	13
(2) 柵 列	13
(3) 祭祀遺構	13
(4) 溝状遺構	15
(5) その他の中世遺構出土遺物	16
Ⅳ まとめ	17
図 版	

例 言

- 本書は、大分市教育委員会が、昭和50・51年度にわたって実施した守岡遺跡緊急発掘調査の概報である。
- 調査団の構成は次のとおりである。
調査主体者大分市教育委員会
調査員後藤宗俊、真野和夫、渋谷忠章、坂本嘉弘、藤田和夫（以上県文化課）
安部幸人、杉崎重臣、小野雅途、羽田野光洋（以上大分市教育委員会文化財係）
調査補助員（学生）亀田修一（九州大学）
後藤一重（岡山大学）栗田勝弘、中山彰宣、富永直樹、平田豊弘、草場啓一（以上別府大学）、岸、木村、金子（以上大分大学）○曲地区の方々○
- 調査中には次の各氏の指導および協力をうけた。
三輪嘉六、水野正好、賀川光夫、小田富士雄、沢村仁、富来隆、中野幡能、佐藤暁、下條信行、広瀬文隆
- 鉄製品・焼土塊の分析については、新日鉄大分製鉄所の御厚意にあずかった。
- 本書の執筆分担は、杉崎（Ⅰ、環境および調査概況、Ⅱのうち住居跡、Ⅲのうちの遺構、写真）、羽田野（Ⅱ、Ⅲのうちの遺物・実測・製図）後藤宗俊（Ⅳのまとめ）である。



大分市守岡遺跡周辺の主要遺跡分布図

1. 守岡遺跡 2. 曲石仏 3. 元町石仏 4. 岩屋寺石仏 5. 羽田遺跡 6. 豊後国府跡（推定） 7. 羽屋遺跡
8. 南大分条里跡 9. 金剛宝戒寺 10. 雄城台遺跡 11. 滝尾横穴古墳群 12. 尼ヶ城遺跡

I、遺跡の環境および調査概況

1. 遺跡の立地と環境

守岡遺跡は^{まがり もりおか}大分市大字曲字森岡にあり、大分川河口の市街地からほぼ南に6kmのところに位置する。ここは南大分平野の東南端にあたり、大分川の右岸にのぞむ比高63mの独立した台地で、ふつう森岡山とよばれている。

ここから西方への眺望はまことにすばらしい。北に大分川の河口から、さらに別府湾がひらけ、西に高崎山を望み、さらに由布・鶴見岳を遠望する。

歴史的景観にも富んでおり、この台地の西端に横穴古墳群があり、東側崖には曲石仏・対双塔（五重塔）・磨崖連碑（いずれも藤原末期）が現存する。中世の砦の周溝と思われる溝の一部も残っている。

この台地の東北には^{いかりや}碓山（頂上に熊野神社）がある。北流する大分川の自然堤防上には、津^{はだ}守を経て羽田・^{しもぐり}下郡と集落がつづく。この集落上には弥生遺跡もつづいていることが確認されており、羽田では昭和35年、弥生後期の土器窯跡の発掘が^{（注1）}報ぜられている。

西方には七瀬川をへだてて^{おきのたけ}雄城台遺跡がある。守岡遺跡と並ぶ大分川下流域の^{（注2）}弥生時代の代表的集落跡であり、昭和35年大分大学の調査によって弥生中・後期の土器窯跡の出土が報ぜられたほか、昭和46年から4カ年にわたり（県立雄城台高校の新設に際し）県文化課による発掘調査がなされている。

当地より北には、大分川をへだてて南大分の^{ふるこう}条里遺構が見られ、古国府・^{はや}羽屋地区は豊後国府跡に比定されている。平野の西端にある豊後国分寺跡は、昭和49年度から5年計画で、大分市教育委員会による発掘調査を実施している。

2. 調査にいたる経過および遺跡の概要

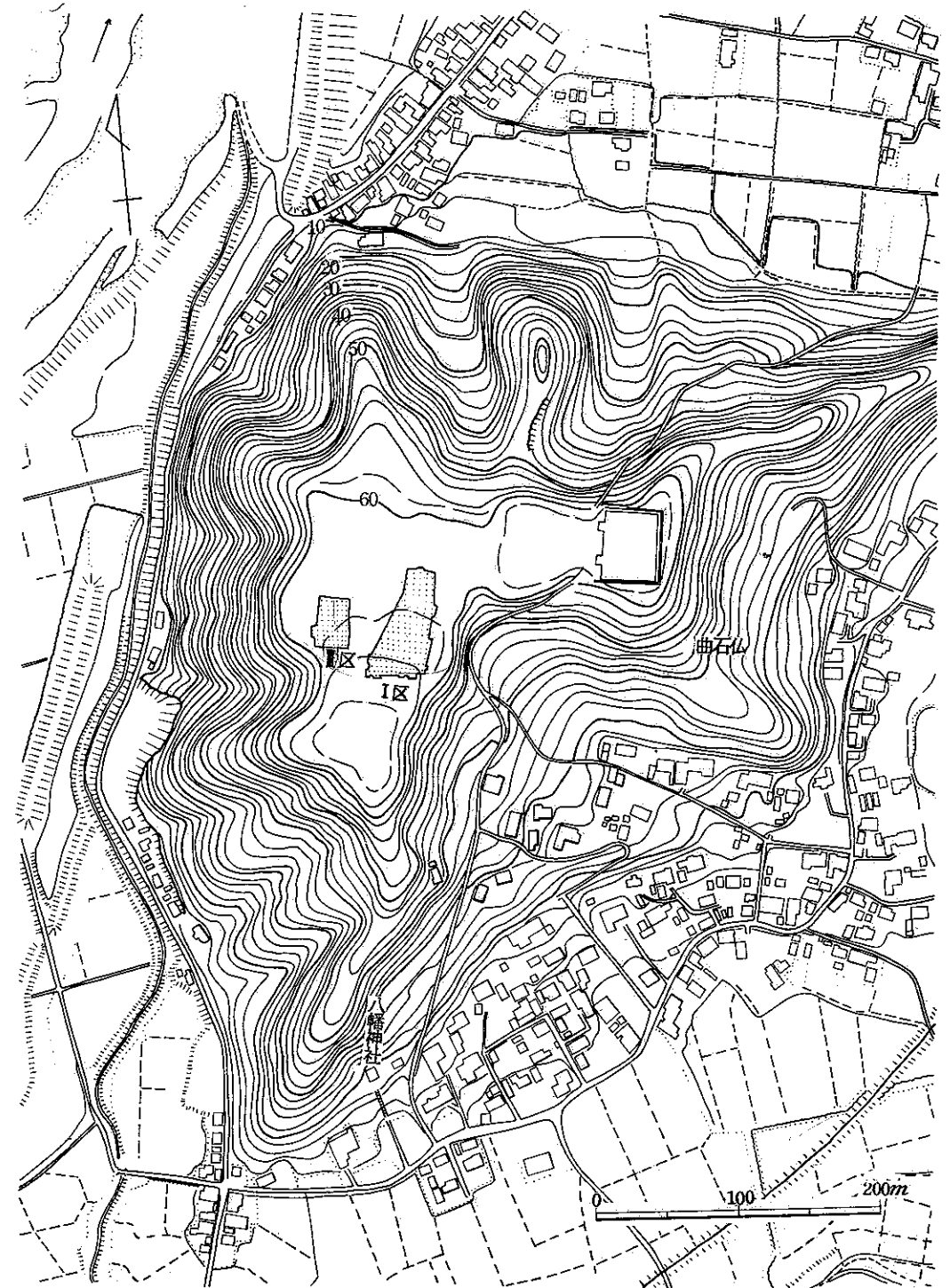
守岡遺跡は周知遺跡としてあげられているが（遺跡地図大分124）新設の小学校用地として昭和50年度から校舎建築が始められることとなった。

そのために、昭和50年5月12日から5月24日まで予備調査をおこなった。この結果、校地の北側半分（校舎敷地）には遺構の存在しないこと、南側半分（運動場用地）に多数の住居跡をはじめとする遺構、遺物の存在することが確認された。

このため、ひきつづいて、第一次調査（以下、Ⅰ区とよぶ）を、昭和50年7月7日から12月26日まで実施した。校地南半分側のうち東側 $\frac{1}{3}$ 、約2250㎡にわたる発掘をおこなった。ついで第二次調査（以下Ⅱ区とよぶ）として、翌51年4月8日から6月26日まで、西側のプール建設敷地となる875㎡の発掘をおこなった。

発掘面積としては運動場敷地の約 $\frac{1}{2}$ 程度にすぎないが、弥生中・後期および古式土師器、さらに中世の遺構が、重複して検出された。なお、調査の当初は、記録の保存を想定してすめられたが、調査成果によって協議の結果、この貴重な遺構を全面的に保存することに決した。未掘の分をふくめて、運動場全体に1.5mの盛土をし、本遺跡の永久保存をはかることとなった。

注、1. 2 大分市教育委員会 大分市の文化財（第7集）昭和41年3月



守岡遺跡の地形及び発掘区

Ⅱ 弥生式土器・古式土師器を伴う遺構

Ⅰ区・Ⅱ区ともに竪穴住居跡を中心に多くの遺構を検出した。住居跡の数は49軒にのぼる。また竪穴跡もある。出土遺物も多いが、土器類は特定の住居跡に集中して出土する傾向がみられた。

住居跡は一部弥生中期のものをふくむが、そのほとんどが後期から古墳時代前期のものである。なかには火災による焼失を示すものも10軒にのぼる。

調査の結果は運動場面積の $\frac{1}{2}$ にあたるⅠ区・Ⅱ区の発掘で図示したような遺構が検出されている。

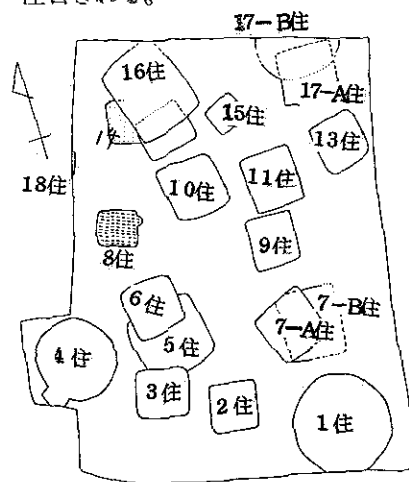
1. 住居跡

住居跡には隅丸方形・隅丸長方形・長方形・円形と種々のプランをもつものがある。隅丸方形および長方形の住居跡は一辺が4mないし6mである。住居跡床面の柱数は2・3・4・6本のものがみられるが、4本柱のものが多い。

円形住居跡は直径が6mないし8m、それに張り出し（入口か？）をもつものもあり、床面の柱は6本である。これらの住居跡はそのほとんどが検出面より30cmで床面に達する。多くは壁面にそって溝をめぐらす。床面中央の焼土（炉跡）のそば、柱と柱との間には、100cm×50cmほどの隅丸長方形の浅い皿状の掘こみ（深さ20～30cm）がつくられ、その周辺には多量の焼土塊が山積みされているものがある。（注）

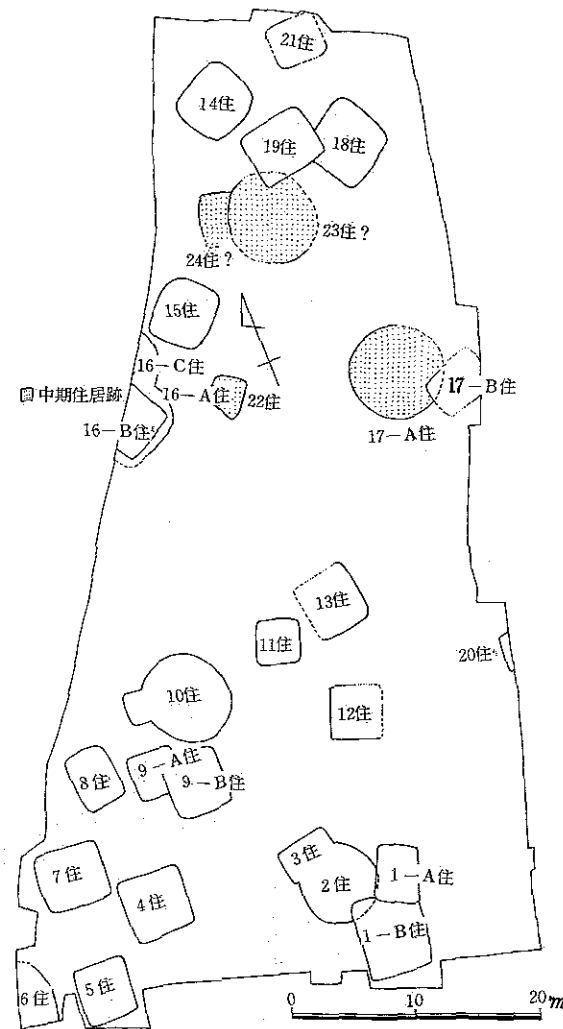
以下代表的なものについて概報する。

（注）このことについては、兵庫県西下野製鉄遺跡（『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書（佐用郡篇）』（昭和51年3月刊））にみられる遺構と類似していることが注目される。



Ⅱ区 住居跡配置図

■ 中世以降住居跡

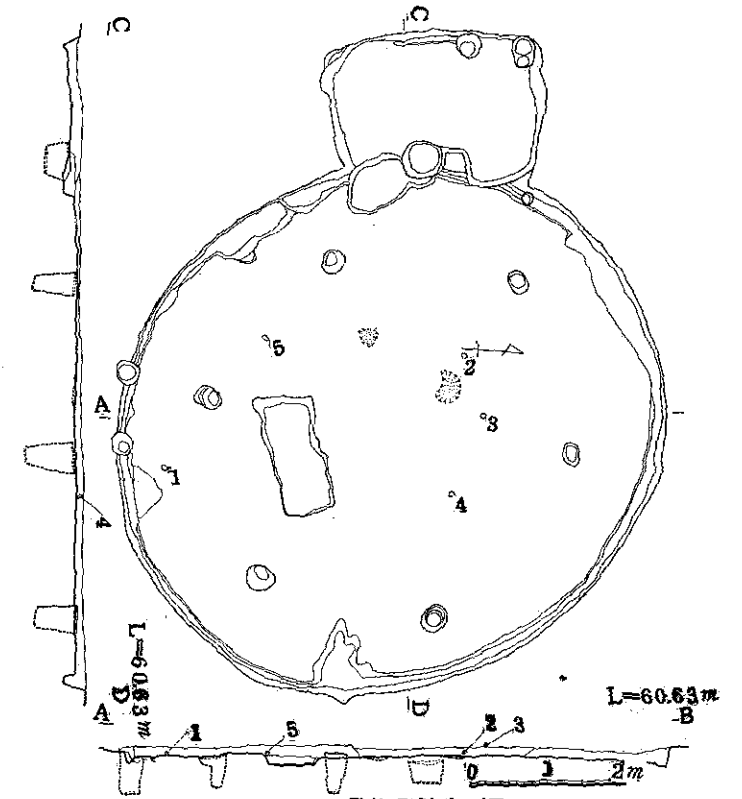


Ⅰ区 住居跡配置図

A1区

(1) 10号住居跡

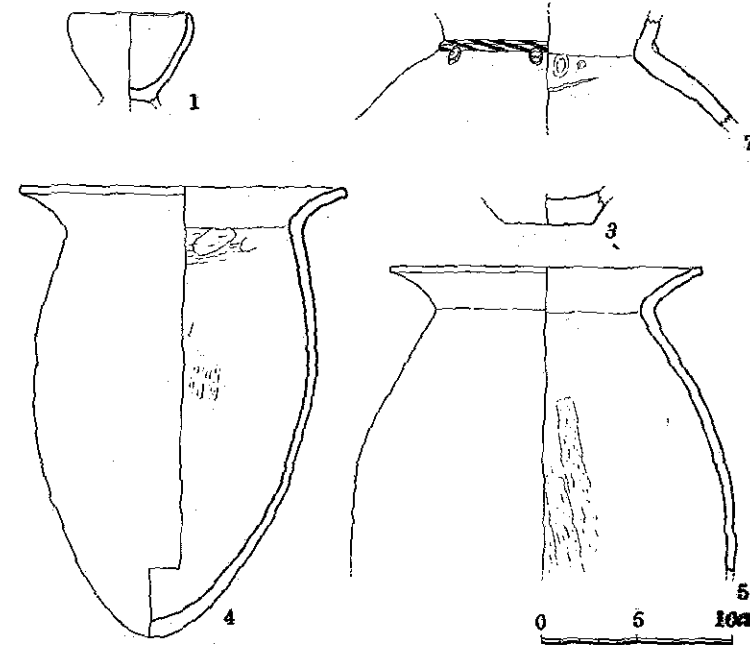
ほぼ円形の住居跡で、長径8.3m（南北）と短径7.08m（東西）。床面6本の柱穴をもつ。北西に張り出し部があり、入口と考えられる。壁の内側にそって溝がめぐらされ、中央北よりに2ヶ所の焼土（炉）がある。また中央南よりに150cm×60cm、深さ30cmの隅丸長方形の浅い掘りこみがある。



第1図 10号住居跡実測図

10号住居跡内の遺物

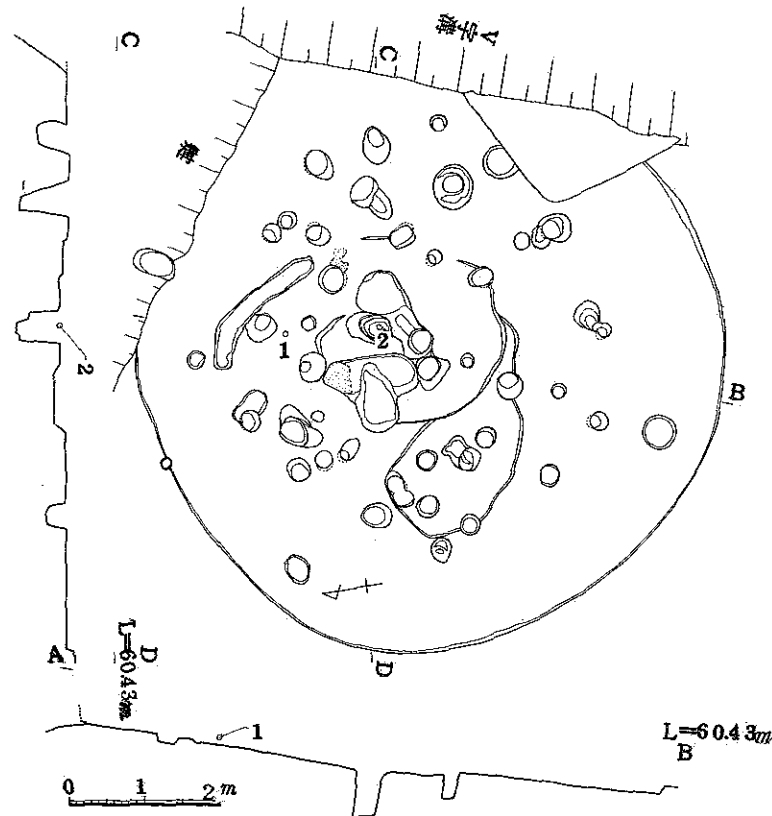
1は脚付鉢のミニチュアで脚部欠損。2は壺の頸部破片で、頸部に刻みを施した貼付文・貼付突帯をめぐらす。3は底部破片で、平底。4・5は「く」の字形に外反する口縁で胴長である。内面の成形・調整はヘラケズリのあと、ヘラ調整をおこなっている。4は丸底気味の平底。これらの土器の大半は床面出土で、時期は弥生後期後半から終末期であろう。



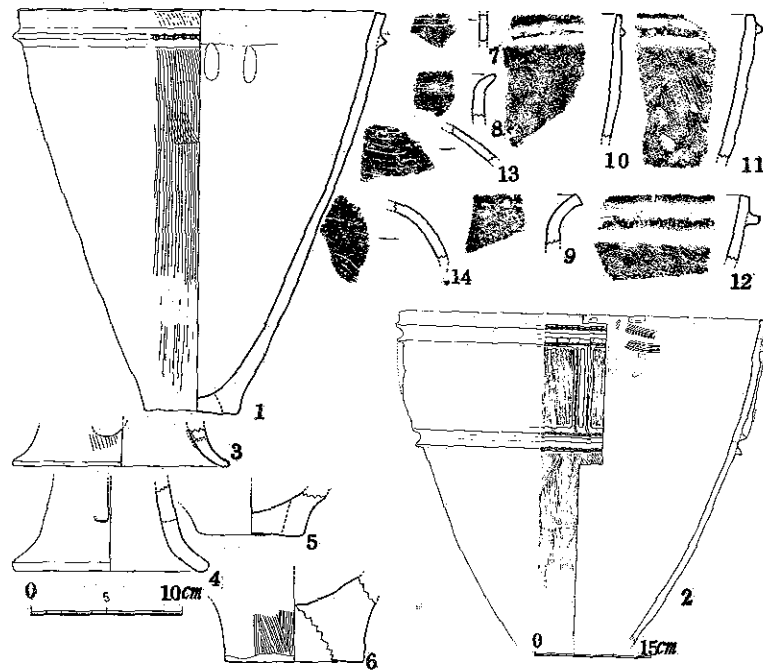
第2図 10号住居跡出土土器実測図

(2) 17-A号住居跡

弥生中期の円形住居跡で、直径が7.7m。床面12本の柱穴をもち、中央北よりに焼土がある。住居跡の東端は17-B号住居跡と中世V字溝（巾2.6m、深さ2.2m）とに切られ北端はU字溝によって切られている。住居跡内には多くの柱穴・掘りこみがあり、内側の溝はなく、重なりが見られる。



第3図 17-A号住居跡実測図



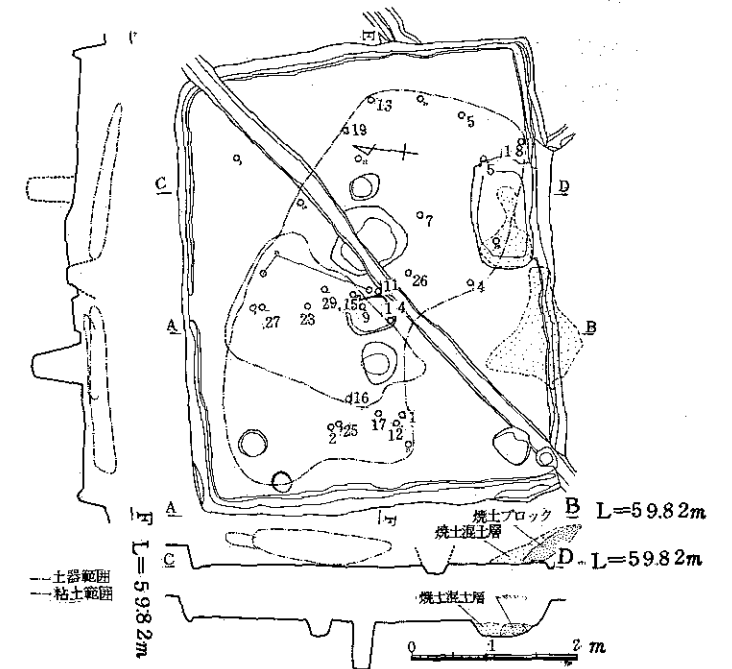
第4図 17-A号住居跡出土土器実測図

17-A号住居跡内の遺物

1・2・6・10・11
・12はいわゆる下城タイプの甕。2は大形甕で口径が47.6cm、高さ現在高42cm、上下2条の突帯間を縦に2条の突帯で結ぶものである。13・14は甕の胴部片、半載竹管の施文具を使用して重弧文様を施すタイプである。3は円形・4は方形の、透しを施す脚部片。5は壺形土器の底部片である。1・2が床面出土、他は覆土内の出土・時期は弥生中期初頭から前半期であろう。

(3) 19号住居跡

隅丸長方形の住居跡で、長径5.6mと短径4.5m。床面に2本の柱穴をもつ。壁内側に巾約10cmの溝。東側の18号住居跡に切りこんでいる。（北東隅より南西隅にと伸びる直溝は、第二次大戦中につくられた、探照燈の電線を埋めたあとである。）中央部に炉あとが見られ、その東より130cmと60cm・深さ40cmの掘りこみがある。南壁には焼け土のブロックが多く見られ、また掘りこみの中からも多量の焼土塊が出土した。



第5図 19号住居跡実測図

19号住居跡内の遺物

土器は住居跡の長軸にそって、平面図に記した範囲で出土した。断面は覆土内から床面にかけ、土器出土の密度は西側部と中央部とに圧倒的に多く、東側部は比較的てんず状をなしている。土器出土の密度は西側部と中央部とに圧倒的に多く、東側部は比較的てんず状をなしている。土器の数量は現在整理中で、その実数は土器とりあげの段階ですでに100個体をこえている。整理が進めば、完形・半完形を含めて200個体を越えるであろう。

ここでこのような出土状態を示す住居・遺物の性格について、いちおう想定される点を列記すれば、①居住、生活で残された土器、②倉庫（④土器類、⑤その他）、③土器製作に関する工房④住居跡の遺棄・廃棄後の一括廃棄 ⑤その他、などが想定される。これらの検討は他日にまきたい。

つぎに代表的な高坏・甕・壺について説明する。

○高坏（5～8）

5・7は口縁部と坏部との境に明確な稜をもち、坏部が浅いものである。5は脚部は短かく、脚柱部と裾部とに明確な稜をもって広がる。7は坏部からラッパ状に広がり、上下2個の穿孔が

2対つくられている。6は坯部が浅い鉢(埴)状になり、脚柱部がややふくらみ、裾との接合部で明確な稜を内側にもち、裾部は一度かるい段をもって広がる。8は口縁部がゆるやかに外反し坯部が深くなるもので、脚はラッパ状に広がる。調整は6・8にハケメ調整をおこなっているが、そのタッチは異なる。5・7はともにナデ仕上げ。胎土・色調・焼成は、5・6・7が似ており、暗黄褐色で、胎土は良好、焼成は堅い。8は赤褐色で、胎土は多量の砂粒を混入、焼成は軟質である。

○甕(14・15・16・17・22・23)

14~17は短かく「く」の字形に外反し、口縁の中ほどで少し肥厚する。胴は球形または上下に多少長く、底部は丸底となる。外面ハケメ調整・細かなタタキ成形を基本としている。口縁の端部が肥厚しないものは14、内側に肥厚するもの16、上下に肥厚するもの15などがある。17は細かく整美なタタキ成形をおこない、そのあと、下半部をナデ消ししている。14・16の肩部には調整と同じ工具による細かな波状文が一周している。15には3個の刺突文が施されている。内面はすべてヘラケズリ、器肉は極めて薄い。胎土には金雲母の混入が特異で、焼成は軟質である。18は頸部から「く」の字形に開く口縁を持ち、口縁端部が垂直に立ちあがり、7本の凹線状沈線を施している。内面はヘラケズリ成形。暗褐色。胎土は多量の細かな砂粒が混入し、焼成は堅い。22・23は口縁部が「く」の字形に外反し、23は22に比べ胴長である。底部は丸底と若干凹む丸底。22は23にくらべシャープな造りである。

○壺(11・12・13・19・24~29)

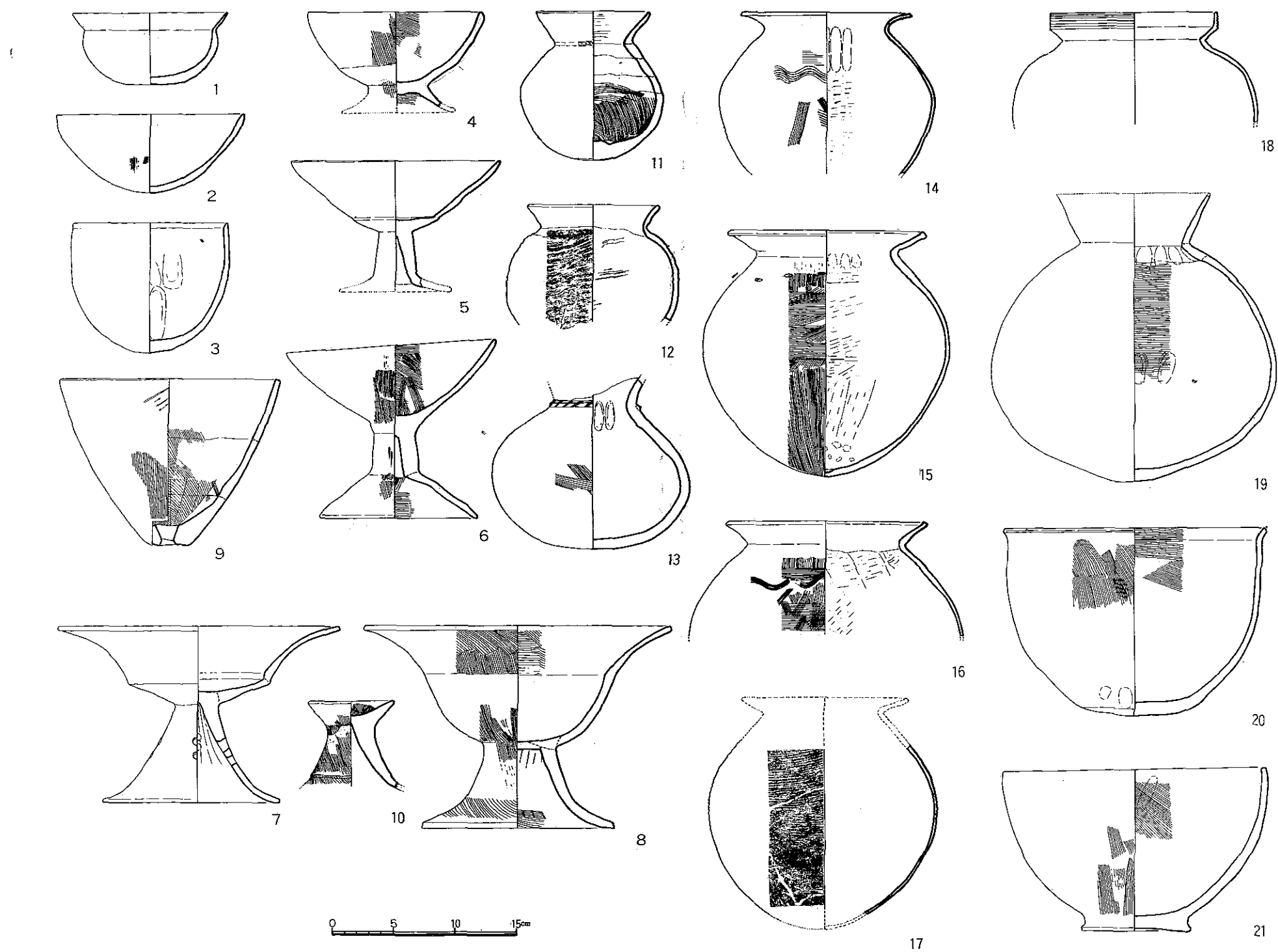
11・12は小形の壺。11は内湾気味に開き、外面はナデ仕上げ、内面は積み上げ痕を残し、粗ケズリ的なハケメ調整をなす。12は短かく直口する口縁で、外面は粗く太いタタキ成形、内面はヘラケズリ形成後かるくナデ調整している。13は胎土が良好な丹ぬり直口の壺。19は最大径を胴下半部にもつ下ぶくれの胴部で、頸部はしまり、直口して開く口縁である。底部は小さな平底、調整は外面は雑なヘラ磨きで平滑、内面接合部を押さえて成形後、横の粗いハケメ調整をなす。外面は暗褐色、内面は暗黄褐色、底部は周辺灰褐色、多量の砂粒を含み、焼成は堅い。24は内傾する頸部から急に開き、さらに上方に外反する二重口縁で、口縁端部を少しつまみ出し丸く仕上げている。胴部は最大径を肩に有し、急にすばまり、大きな平底へ移向する。調整は口縁・頸部は内外面ヨコナデ調整。上半部外面は縦・横・縦のハケメ調整をおこない、下半部は斜めの粗いハケメ調整。内面はすべてヘラケズリ成形の後かるいナデ調整をなす。淡黄褐色、多量の砂粒・微量の金雲母混入、焼成は軟質である。

25・26は内傾二重口縁をもち、口縁に櫛描波状文を施すもの25、ハケメ調整で無文のもの26がある。25は頸部・胴中央に「メ」形刻みを入れた貼付突帯を施し、焼成後に孔を穿っている。27・29は直行して開く口縁で、卵形の胴部から丸底に移行する。28は口縁が短かく外反し、先端が丸い。最大径は胴中央にあり、底部は稜をもつ平底的な丸底。内面には積み上げ痕が残り、巾広のハケメ調整をなす。暗黄褐色で軟質である。

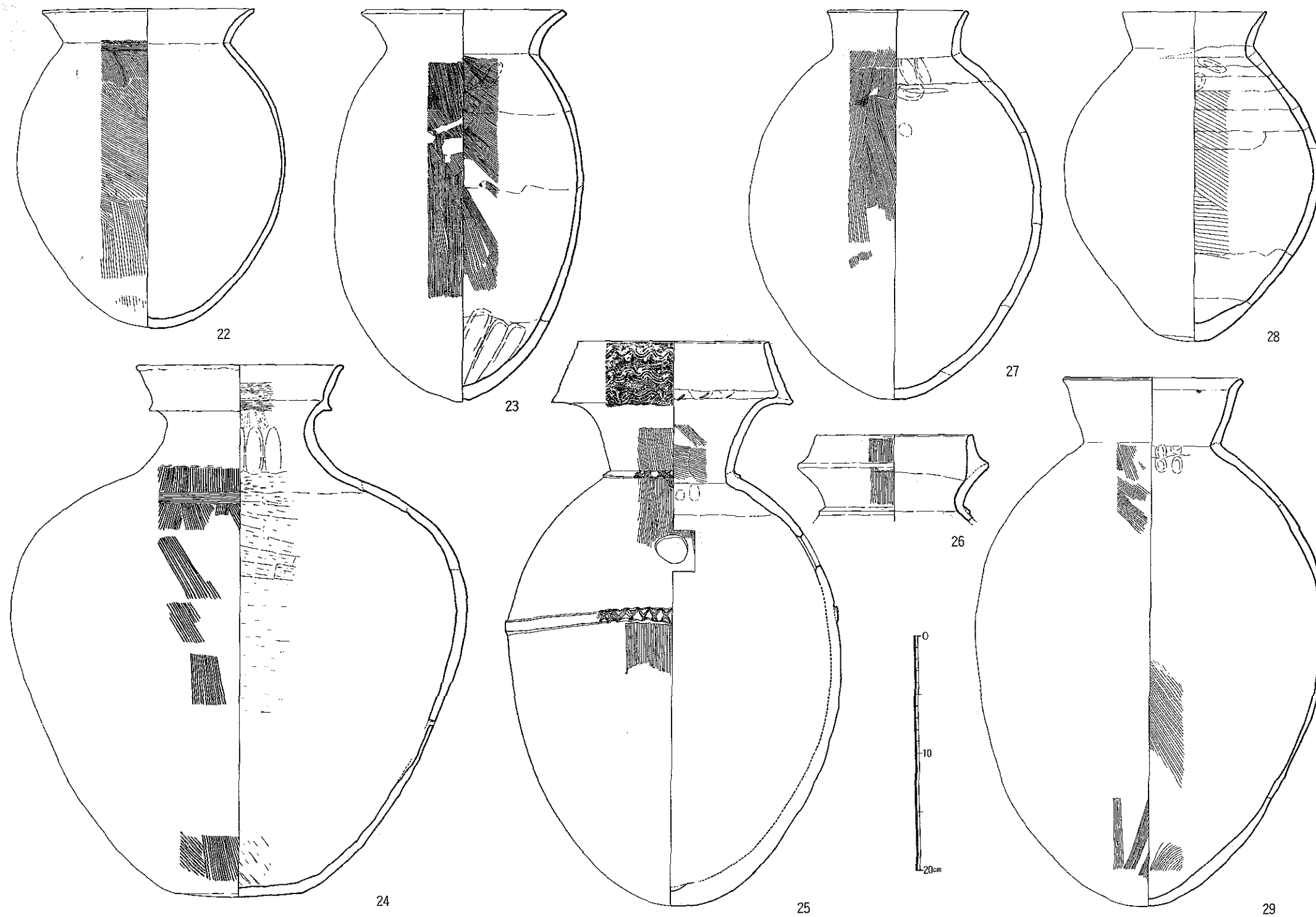
以上、搬入品及び外来系の土器に留意し、在地系の土器とともに高坏・甕・壺について簡単に説明した。

さて、これら土器の時期であるが、従来弥生式土器として把握されてきた在地系土器群といゆる土師式概念の範疇に入る外来系土器群が混在し出土したことは最も注目されることであった。今

(現在のところ)一括廃棄の状態で出土した土器群を一応セットとみなし、古式土師器として扱いたい。すなわち従来漠然としていた所謂安国寺式土器細分の良好な指標となる資料と思われる。



第6图 19号住居跡一括出土土器実測図 (1)



第7图 19号住居跡一括出土器実測図 (2)

B II区

(4) 1号住居跡

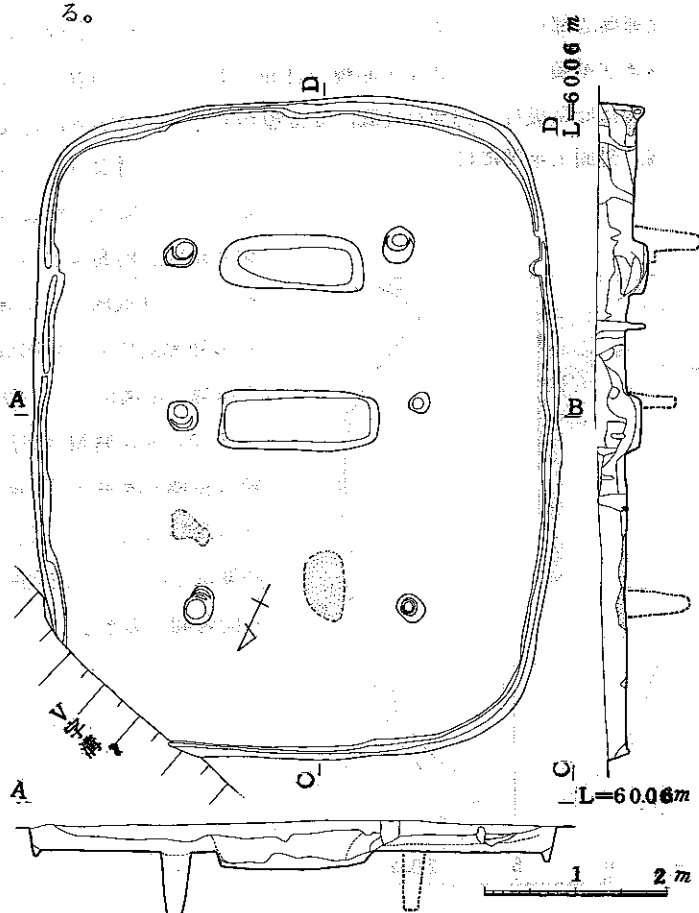
円形住居跡で、直径8 m、床面に8本の柱穴をもち、壁内に、溝をもつ。西隅を中世の溝状遺構で切られている。炉あとは中央東と西に2ヶ所あり、その南に、柱と柱にはさまれて、 $150\text{cm} \times 70\text{cm}$ ・深さ30 cmの掘り込みが見られる。

1号住居跡内の遺物

各器種にわたって多量の完形。半完形の土器が浮いた状態で出土。これらの土器と共に舶載の内行文花鏡片が床面から5 cm程度浮いて出土した。他に刀子片などの鉄製品、磨製及び打製の石鏃が出土している。時期は弥生後半から終末期であろう。

(5) 16号住居跡

隅丸長方形の住居跡で、南北7.2 m、東西4.7 m。床面に6本の柱穴をもち、壁内側に溝がある。



炉は中央東と中央西寄りに2ヶ所あり、掘り込みも2つあり、中央の柱と柱との間に、 $180\text{cm} \times 50\text{cm}$ ・深さ35 cmの掘り込み、また南の柱と柱の間に $150\text{cm} \times 50\text{cm}$ ・深さ40 cmの掘り込みが見られる。12号住居跡が南を、14号住居跡が西側を切り、重複が見られる。

16号住居跡内の遺物

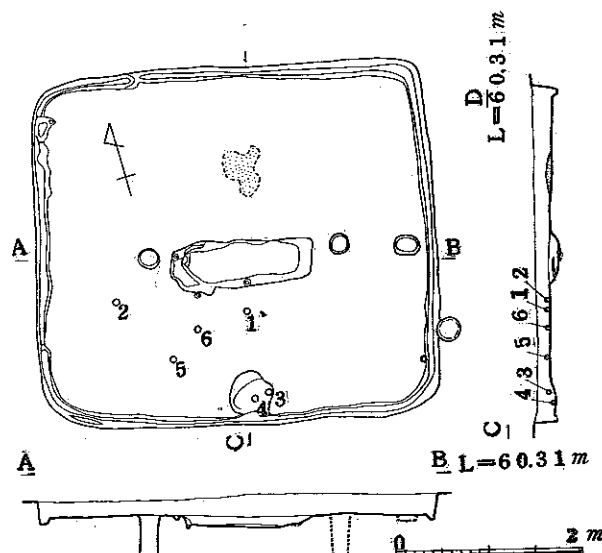
多量の完形・半完形の土器が出土した。出土状況は、浮いた土器、床面の土器および方形の土坑施設内の土器等である。それぞれの性格を検討する必要がある。

ほかに鉋（やりがんな）・打製の石鏃・砥石などが出土した。時期は弥生終末期であろう。

第8図 16号住居跡実測図

(6) 3号住居跡

隅丸方形住居跡で、4.27m × 8.80mの広さをもつ。床面に2本の柱穴をもち、壁内側に溝をめぐらしている。炉跡は中央北寄りに1つあり、柱と柱の間に130cm×50cm、深さ30cmの掘り込みがある。この住居跡が、北側の5号住居跡を切っている。

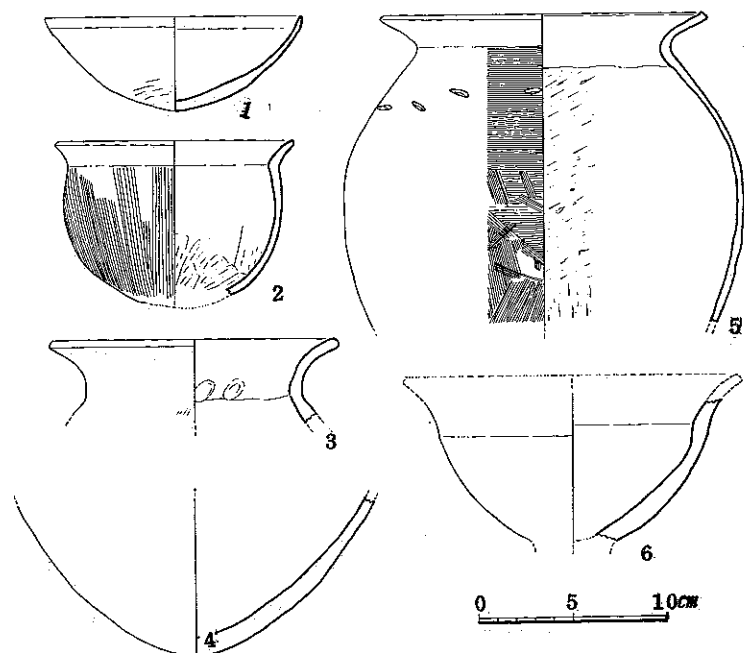


第9図 3号住居跡実測図

3号住居跡内の遺物

すべて床面より出土、1は鉢で底部周辺部を一部ヘラケズリし、その後かるくナデ仕上げしている。胎土は良好で、砂利を多く含まず軟質である。2は小形甕で外面7本のハケメ調整。内面はヘラケズリ成形。3は甕の口縁。4は底部破片で完全な丸底。5は短かく「く」の字形に外反し、口縁が小さく内側に肥厚する甕。外面上半部にはヘラ刺突文が一周し、横の丹精なハケメが

あり、下半部は乱雑なハケメ調整、内面はすべてヘラケズリ成形。6は高坏の坏部破片で、坏部深く口縁との境にかかる稜をもつ。他に磨製及び打製の石鏃・扁平片刃石斧・砥石類が出土している。時期はⅠ区19号住居跡と同時期であろう。



第10図 3号住居跡出土土器実測図

番	住居跡番号	平面形	長軸方向	時 期	
Ⅰ 区					
1	1-A住居跡	長方形	北北東	弥生終末・古墳?	
2	1-B "	長方形	北	終末	火災 炭化材 柱根炭化を確認
3	2 "	円形		終末 ?	火災 炭化材 柱根炭化を確認 多量の焼土
4	3 "	長方形	北 東	終末	
5	4 "	方形	北	終末	西側にベット状遺構
6	5 "	方形	北	終末	
7	6 "	円形		終末	
8	7 "	方形	北 東	終末	火災 焼土
9	8 "	隅丸長方形	北	終末	
10	9-A "	方形	東南東	終末・古墳?	火災 炭化材
11	9-B "	長方形	北	終末 ?	張り出し部入口か
12	10 "	円形・張り出し	北 東	終末・古墳?	
13	11 "	方形	北北東	終末	
14	12 "	方形	北北東	終末	
15	13 "	方形(推定)	北北西	終末	火災 若干の炭化材 焼土
16	14 "	隅丸方形	北	終末	火災 若干の炭化材 焼土
17	15 "	隅丸方形	北北西	終末	火災 炭化材 焼土
18	16-A "	不定円形・隅丸方形	北北西	終末	
19	16-B "	方形	北北西	弥生中期 ?	
20	16-C "	円形 ?		中期	
21	17-A "	円形		終末・古墳 ?	
22	17-B "	長方形	東北東	終末	西壁北コーナーにベット状遺構 火災 炭化材
23	18 "	隅丸方形	北北西	終末・古墳 ?	多量の土器 粘土 河原石?
24	19 "	長方形	東北東		住居跡か不明
25	20 "	方形 ?		古墳	火災 炭化材 焼土
26	21 "	長方形	北 東	弥生中期	
27	22 "	不定方形	西北西	中期	住居跡か不明
28	23 "	円形 ?		中期	住居跡か不明
29	24 "	方形 ?			
Ⅱ 区					
30	1 住居跡	円形		弥生終末 ?	廃棄の可能性あり
31	2 "	方形	北北東	終末	
32	3 "	長方形	東南東	終末・古墳?	
33	4 "	円形・張り出し	北 東	終末 ?	火災 炭化材 焼土 張り出し部入口か
34	5 "	方形	北	終末	桃の種
35	6 "	方形	北	終末	
36	7-A "	方形	北北西	終末	
37	7-B "	方形	北	終末	
38	8 "	長方形	東南東	中世以降	南壁中央に貯蔵穴
39	9 "	長方形	北北東	終末	火災 多量の炭化材
40	10 "	不定方形	北北西	終末	
41	11 "	長方形	北	終末	
42	12 "	方形	東	終末	
43	13 "	方形	北北西	終末	
44	14 "	方形	?	弥生中期	
45	15 "	長方形	東北東	終末	
46	16 "	隅丸方形	北北西	終末 ?	桃の種・廃棄の可能性あり(方形埴内含めて)
47	17-A "	方形	北	終末・古墳?	南壁中央に落ち込み (貯蔵穴か)
48	17-B "	円形		終末	
49	18 "	方形			住居跡か不明

(注)・本表は、図面整理の際作製した
・住居跡の時期は、上記の理由及

(羽田野 作製)

守岡遺跡Ⅰ・Ⅱ区住居跡一覧表

番	住居跡番号	平面形	長軸方向	長軸・短軸の長さ (の数字は現地値)	主柱穴の数と形	住居跡の数と位置	方形土坑の数と位置 (方位は概略でない)	壁溝	出土遺物	他の住居跡との復合関係	時期	
Ⅰ区												
1	1-A住居跡	長方形	北北東	4.50m×3.35m	2	1方形土坑使用か	1中央主柱穴間(長軸北北東)	東壁に確認	完形土器1 他は土器破片	2住 1-Bを切っている	弥生終末・古墳?	
2	1-B "	長方形	北	6.42 ×5.33	4 長方形	2中央西寄り	1南主柱穴間	4 壁	完形土器2~3 砥石	2住を貼り1-B住に切られている	終末	火災 炭化材 柱根炭化を確認
3	2 "	円形		6.07 ×6.00	6 六角形	1中央北寄り	1中央南寄り	一周	完形土器約3 土器破片 鉄鍬2 石皿	1-A住に切られ1-B住に貼られている	終末?	火災 炭化材 柱根炭化を確認 多量の焼土
4	3 "	長方形	北東	4.27 × ?	2		1中央主柱穴間(長軸北東)	無し	完形土器1 他は土器破片	2住を切っている	終末	
5	4 "	方形	北	5.13 ×5.10	4 方形	1中央北寄り	1中央南寄り	4 壁			終末	西側にベット状遺構
6	5 "	方形	北	4.64 ×4.22	4 方形	1中央	1南主柱穴間	4 壁	完形土器2 他は土器破片		終末	
7	6 "	円形		?							終末	
8	7 "	方形	北東	5.29 ×4.28	4 方形	?	1中央南寄り	4 壁	土器破片		終末	
9	8 "	隈丸長方形	北	4.98 ×3.65	2		1中央主柱穴間(長軸北)		完形土器約2~3 刀子1 鉄鍬1 石皿 石函丁1		終末	火災 焼土
10	9-A "	方形	東南東	3.65 ×3.57	4 (2未検出)	?	1南主柱穴間	無し		9-Bに切られている	終末	
11	9-B "	長方形	北	5.30 ×4.61	4 長方形	2中央北寄り	1中央南寄り	4 壁	完形土器約10 釜1 砥石 鉈	9-A住を切っている	終末・古墳?	火災 炭化材
12	10 "	円形・張り出し	北東	8.36 ×7.08	6 六角形	2中央北寄り	1中央南寄り	一周	完形土器1 他は土器破片		終末?	張り出し部入口か
13	11 "	方形	北北東	3.80 ×3.62	4 (1未検出)	1中央(方位が不明)	無し	4壁(推定)	完形土器約6 ミニチュア土器 他は土器破片		終末・古墳?	
14	12 "	方形	北北東	4.55 ×(4.00)	4 方形	1方形土坑使用か	1中央主柱穴間(長軸北北東)	4壁(推定)	土器破片		終末	
15	13 "	方形(推定)	北北西	4.91 × ?	4 方形	1中央	1南主柱穴間	4壁(推定)			終末	
16	14 "	隈丸方形	北	5.52 ×5.32	4 方形	2(?)中央北寄り	1南主柱穴間	4壁	完形土器約2 他は土器破片		終末	火災 若干の炭化材 焼土
17	15 "	隈丸方形	北北西	5.40 ×(4.85)	3(4(1未検出))		1南主柱穴間	南東壁に確認	刀子1? 他は土器破片		終末	火災 若干の炭化材 焼土
18	16-A "	不定形(隈丸方形)	北北西	?	5(6(1未検出))	1中央北寄り	1南主柱穴間	4壁(推定)	完形土器約4 磨製鉄1 砥石 石皿	16-B住を貼っている	終末	火災 炭化材 焼土
19	16-B "	方形	北北西	5.00 × ?	4 (1未検出)	?	1南主柱穴間	東壁に確認		16-A住に貼られている	終末	
20	16-C "	円形?		?							弥生中期?	
21	17-A "	円形		7.63 × ?	12 12角形	1(2)中央北寄り		無し	完形土器約2 他は土器破片	17-B住に切られている	中期	
22	17-B "	長方形	東北東	4.80 ×3.66	?	1中央南寄り	?(中央か)	4 壁	土器破片 (1個体分)	17-A住を切っている	終末・古墳?	
23	18 "	隈丸方形	北北西	5.70 ×5.50	4 方形	1中央	1南主柱穴間	4 壁	完形土器約4 他は破片	19住に切られている	終末	西壁北コーナーにベット状遺構 火災 炭化材
24	19 "	長方形	東北東	5.60 ×4.51	2	1中央	1南壁東寄り	4 壁	完形半完形土器約200 土器 磨製鉄1、打製鉄1	18住を切っている	終末・古墳?	多量の土器 粘土 河原石?
25	20 "	方形?		3.16 × ?								住居跡が不明
26	21 "	長方形	北東	4.20 ×3.54	2	3北壁寄り	1中央主柱穴間(長軸北東)	4 壁	完形土器約4 鉄斧1 鉄鍬2		古墳	火災 炭化材 焼土
27	22 "	不定方形	西北西	3.36~2.85×2.80	4 (1溝でカット)	1中央	無し	無し	平底を含む土器破片		弥生中期	
28	23 "	円形?		?					落ち込み 柱穴内より平底完形土器1		中期	住居跡が不明
29	24 "	方形?		?							中期	住居跡が不明
Ⅱ区												
30	1 住居跡	円形		8.00 ×7.84	8 8角形	2中央西寄り・東寄り	1中央南寄り	一周	完形土器約30 内子文鏡1鉄鍬2刀子片1?磨製鉄1打製鉄2		弥生終末?	廃棄の可能性あり
31	2 "	方形	北北東	3.85 ×3.72	2	1中央	1中央	4 壁	完形土器約2鉄鍬1磨製鉄1未製品1		終末	
32	3 "	長方形	東南東	4.27 ×3.80	2	1中央北寄り	1中央主柱穴間(長軸東南東)	4 壁	完形土器約3磨製鉄1打製鉄1扁平石斧1砥石?	5住を切っている	終末・古墳?	
33	4 "	円形・張り出し	北東	7.22 ×6.16	5(6(1未検出))	4中央北寄り	1中央南寄り(不定形)	一周	土器破片ミニチュア土器 鉈2鉄鍬1刀子片1?打製鉄1石皿		終末?	火災 炭化材 焼土 張り出し部入口か
34	5 "	方形	北	5.82 ×5.47	4 方形	1中央東寄り	1南主柱穴間	無し	磨製鉄1未製品1打製鉄1	3・6住に切られている	終末	桃の種
35	6 "	方形	北	(4.21) ×4.01	4 方形	1中央	1南主柱穴間	4 壁	完形土器約6ミニチュア土器1鉄鍬1刀子片1?打製鉄1磨製鉄1	5住を切っている	終末	
36	7-A "	方形	北北西	4.70 ×4.55	4 方形	1中央	1南主柱穴間	4 壁	完形土器約2 勾玉1鉄鍬3刀子片1?砥石	7-B住を切っている	終末	
37	7-B "	方形	北	5.25 × ?	?	?	?	無し	土器破片	7-A住に切られている	終末	
38	8 "	長方形	東南東	3.61~3.69×2.95	主柱穴検討中	カマド東壁北コーナー		無し	土器破片		中世以降	南壁中央に貯蔵穴
39	9 "	長方形	北北東	4.20 ×3.60	東壁コナ2他不明	1中央北寄り	1中央(小)	4 壁	完形土器約3鉄鍬3石皿		終末	火災 多量の炭化材
40	10 "	不定方形	北北西	4.80 ×4.70	4 方形	方形土坑使用か	1南主柱穴間	4 壁	完形土器約3石皿砥石		終末	
41	11 "	長方形	北	4.65 ×4.10	4 長方形	1中央	1南主柱穴間	4 壁	完形土器約5ミニチュア器1磨製鉄片1鉈1石製品1砥石		終末	
42	12 "	方形	東	3.97 ×(3.46)	?	方形土坑使用か	1中央	4 壁	土器破片	14住を切り、16住に切られている	終末	
43	13 "	方形	北北西	4.10 ×3.92	4 方形		1南主柱穴間	4 壁	土器破片鉄鍬3磨製鉄1打製鉄1石皿		終末	
44	14 "	方形	?	? ×3.48	?			無し	平底を含む土器破片	12・16住に切られている	弥生中期	
45	15 "	長方形	東北東	2.74 ×2.30	2	1方形土坑使用か	1中央	4 壁	土器破片打製鉄1		終末	
46	16 "	隈丸方形	北北西	? ×4.32	6 長方形	2中央東寄り・北寄り	2中央・南主柱穴間	4 壁	完形土器約30鉄鍬2鉄鍬4鉈1打製鉄1砥石石皿	12・14住を切っている	終末?	桃の種・廃棄の可能性あり(方形土坑も含めて)
47	17-A "	方形	北	7.17 ×5.72	?		1中央(小)	4壁(推定)	完形土器約2磨製鉄2姫島産黒曜石塊砥石	17-B住を切っている	終末・古墳?	南壁中央に落ち込み(貯蔵穴か)
48	17-B "	円形		6.70 × ?	?	1中央か	1中央南寄り	一周(推定)	土器片打製鉄1	17-A住に切られている	終末	
49	18 "	方形		2.40 × ?	?			?				住居跡が不明

(注)・本表は、図面整理の際作製した。遺物の大半は未整理なので、出土遺物等不完全なものである。本報告の際完全を期したい。

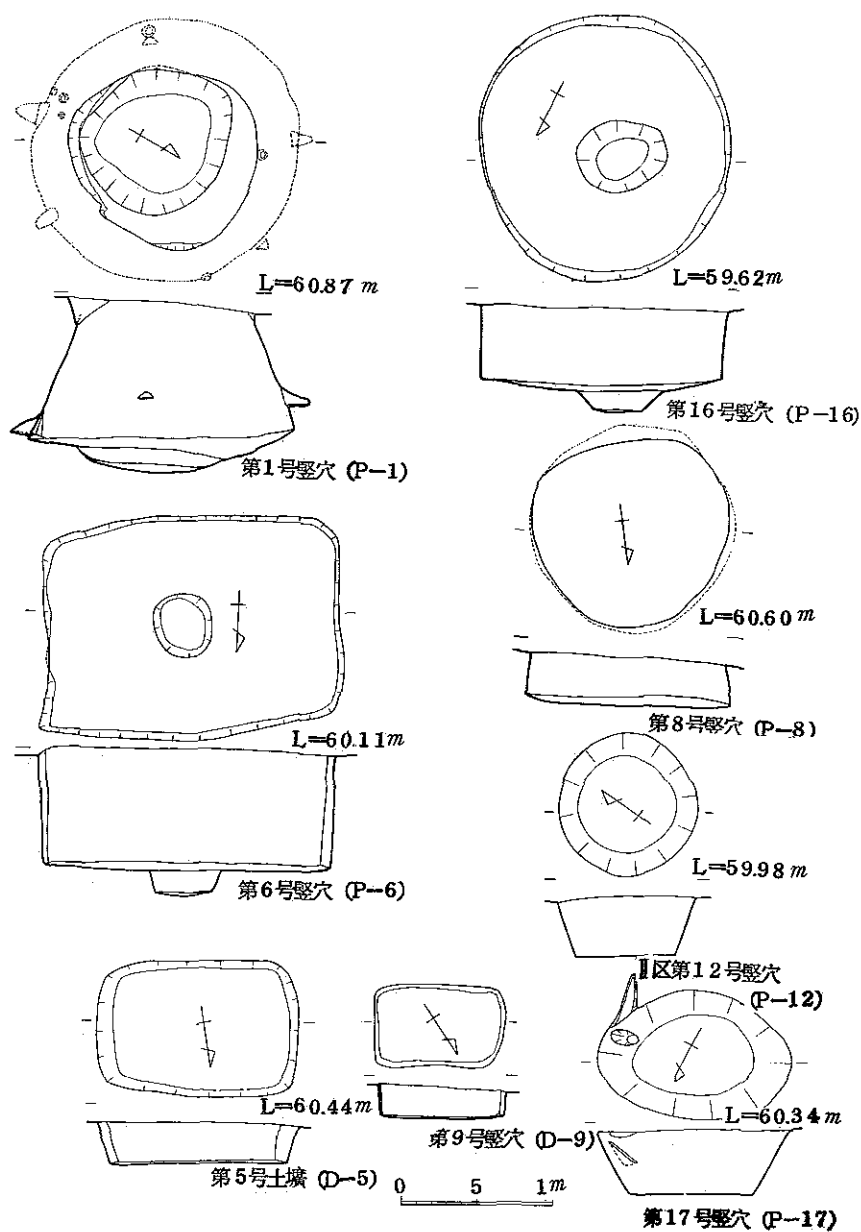
(羽田野 作製)

・住居跡の時期は、上記の理由及び、東九州土器編年大系をも確立しておらず、例えば、弥生後半・終末 古式土師器等の変更あることを明記しておく。

2. 堅穴遺構

堅穴とは、形状・出土遺物・埋土の状態から、ここではいちおう弥生時代の貯蔵穴、また土器等の廃棄穴と理解しておく。堅穴はⅠ区・Ⅱ区で合計77基を検出した。

平面プランは方形・長方形・隅丸長方形・円形・楕円形などの各種がある。袋状をなすもの



第11図 Ⅰ区・Ⅱ区堅穴土坑遺構

・垂直に立ち上がるもの・逆梯形状をなすものなどがある。切り合い関係から、方形→円形への推移が確認された。堅穴を埋めていた土砂についての検討はしていない。時期は弥生前期末から中期にかけての所産と思われる。

3 住居跡内の焼土塊等について

今回の調査では住居跡について、次のような注意をすべき事実がみられた。

- ① 住居跡の内部に、炉跡とは別に約 $50\text{ cm} \times 100\text{ cm}$ ほどの掘こみ（深さ $20 \sim 30\text{ cm}$ ）がつくられているものがある。（内に生の粘土が残されているものがある。）
- ② 住居跡内に多量の焼土塊がみられる。
- ③ 1区19号・Ⅱ区1号住居跡のように、土器類が特に多く出土しているものがある。
- ④ 鉋（やりがんな）などの鉄製品と砥石類（およびその類品）が比較的多い。
- ⑤ 焼失した住居跡が多い。

これらの点の意味するものについて今後あらためて検討をすすめることとしたい。

なお、鉄製品および焼土塊の成分について、新日鉄大分製鉄所の御厚意で、下記の分析結果と、それについての意見を頂いたので、ここに付記する。

a 鉄製品および焼土塊の分析表

試料番号

(分析掛記入)	(依頼者記入)	Si	Mn	P	S	Cu	Ti			
9-464	鉄片	1847	001	0117	0086	0004	0043			
(分析掛記入)	(依頼者記入)	TFe	MFe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	TiO ₂
C 294	焼土塊	6.00	0058	0.36	8.09	49.42	23.74	0.65	1.04	0.95
295		57.2	0058	0.43	7.62	49.38	21.96	0.88	1.07	0.97
(分析掛記入)		Cr ₂ O ₃	MnO	C	S	P ₂ O ₅	Sn	Ni	Pb	Zn
C 294		0.004	0.21	0.61	0.039	0.247	0.001	0.003	0.006	0.128
295		0.006	0.23	0.63	0.084	0.944	0.002	0.002	0.005	0.114
(分析掛記入)		Cu	V							
C 294		0.003	0.020							
295		0.003	0.019							

b 所見

- ① 地金は鉄鉱石を原材料とした鋳物と思われること。
 - ② 焼土塊の Al_2O_3 (SiO_2) 粘土分は、鋳鉄を作るのに重要に役だつこと。
- 以上のようなのである。

Ⅲ 中世遺構

当遺跡では弥生時代から古墳時代の遺跡と重複して、中世遺構の出土も多い。遺構は掘立て柱の建物跡・棚列・祭祀遺構・溝状遺構・カマド跡・井戸など多彩である。掘立て柱の建物跡と見られるものは、Ⅰ区だけで、9つを数える。井戸は1区の東南隅に1ヶ所・カマド跡はⅡ区西側で検出された。

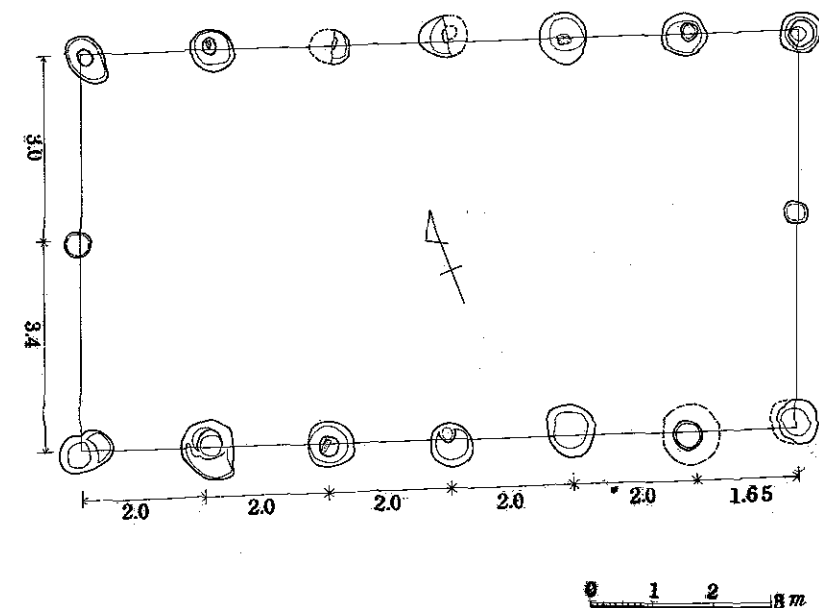
(1) 掘立柱建物跡

このほとんどが弥生住居跡と重複しているが、中核となると思われるものは、渠間2間・桁行6間（ $640\text{ cm} \times 1164\text{ cm}$ ）の建物跡である。これに2間×4間（ $500\text{ cm} \times 900\text{ cm}$ ）、1間×3間（ $400\text{ cm} \times 700\text{ cm}$ ）のタイプの建物に伴う。

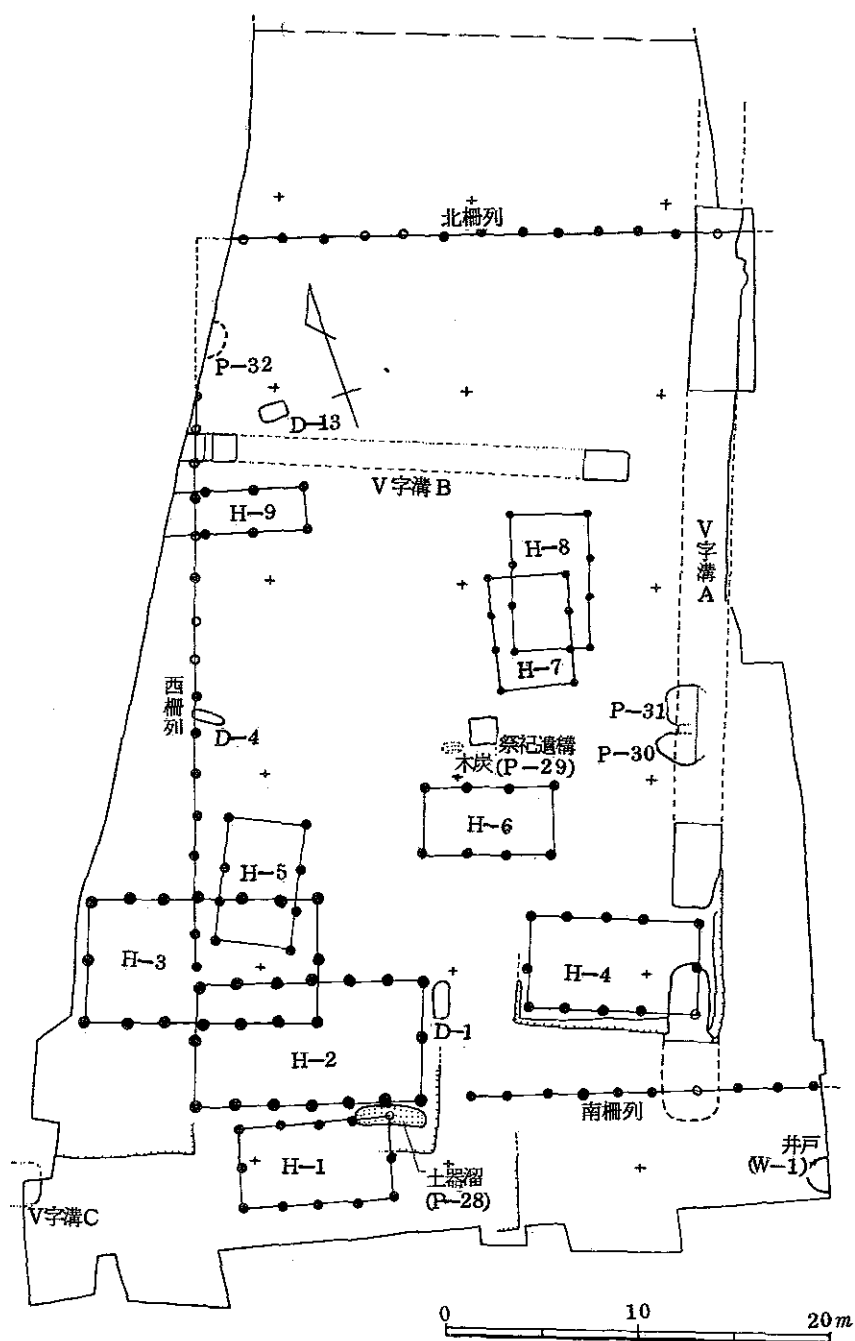
それぞれ東西・南北に配置され、溝の状態とともに中世館の様相を示している。

(2) 棚列

東側V字溝の西2.5mに、それと平行して、約2m間隔で、またV字溝と直角に南と北にも同じく棚列と思われる柱穴がある。広さは2.5m×4.5mで、建物跡は棚列内は少く、とくに主要な建物跡は、その棚列外まで広がっている。柱穴の直径は30～50cm程度である。



第12図 H-2掘立柱建築遺構実測図



第13図 中世遺構模式図

(3) 祭祀遺構

135cm×140cmの方形祭祀遺跡で、小さな白い川原石を一面にしきつめてある。その中に土師質の土器が見られた。現在も神社でみられる斎場(被所)の類の遺構であろう。同じ台地上にある曲石仏・寺院跡との関連など検討の必要があろう。

出土遺物

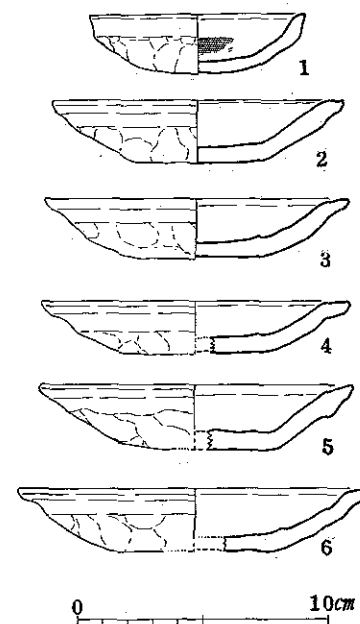
1は口径8.6cm、高さ2.3cmの手捏小皿・口縁部が肥厚く、外面には強いナデを行ない稜を残す。体・底部の外面は指頭成形、内面には布痕を残す。底部は凹むが丸底。2～5は口径11.6cm～12.6cm、高さは2.1cm～2.6cmの手捏小皿。口縁部は引きのぼされ外反し、体部と口縁との境は強いナデのため段を残す。底部は平底あるいは凹底。内面体部・口縁には指による右回りのナデをし、見込みとの境にかかるい段がつく。外面は指頭形成による凹凸が多い。6は口径14.3cm、高さ2.5cmの小皿で他のものより口径が最も大きい。これら小皿の胎土には砂利をほとんど含まず、そのため焼成は堅いが、もろく破れやすい。淡黄色、すべて灯心油痕・煤の付着はない。

これら土師質手捏小皿の類例としては、福井県一乗谷朝倉氏遺跡出土のものに酷似し、畿内地方の中世(16世紀代)遺跡出土のものに類似する。従って、時期は室町時代後半期の所産として理解しておきたい。

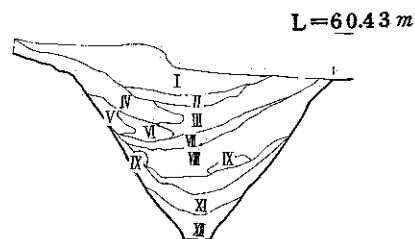
(4) 溝状遺構

I区東側を南北にのびるV字溝がある。巾2.5m・深さ2m・長さ45m(確認部分のみ)・そのV字溝と直角に東西にのびるU字溝は巾1.5m・深さ0.8m・長さ23m(確認部分のみ)・その20m北隅にあるV字溝は巾1.5m・深さ1m・長さ5m(確認部分のみ)である。

II区では東側を南北にのびる溝は、巾1m・深さ0.3m・長さ30m(確認部分のみ)・その北側を東西にのびるV字溝は巾2m・深さ1m・長さ25m(確認部分のみ)で、このV字溝がI区北のU字溝と連なっている。構内の遺物はほとんどが流れ込みで、一部では石を投入した形跡も見られる。相互に直交する溝の状況は中世の館等の遺構かと思われる。

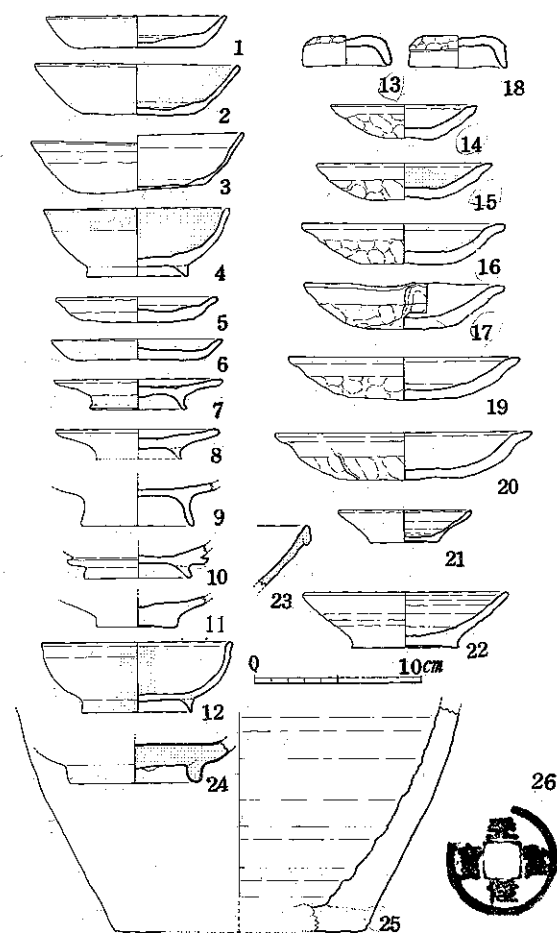


第14図 祭祀遺構出土遺物



第15図 V字溝A土層図

- I - 暗褐色 (黄褐色粒子、小石混入)
- II - 黒褐色 (多量のロームブロック・粒子混入)
- III - 暗茶褐色 (ボロボロしており、混入物はIIと同じ)
- IV - 暗褐色 (Iより暗い部分的にロームブロック混入)
- V - 黒色 (粘質あり)
- VI - Vと同様だがVより明るく灰色を呈する (粘質あり)
- VII - 黄褐色 (ロームそのもの、部分的にブロック状なす)
- VIII - 黒褐色し斑紋状 (ロームブロック混入、粘質あり)
- IX - VIIIと同一層だがこの部分のみ暗黄褐色粒子、ブロック混入、明るい)
- X - V・VI層と同じ
- XI - 暗褐色 (砂質でさらさらして、部分的黄褐色粒子混入)
- XII - 褐色 (ロームが風化して流れ込んだ状態、さらさらして砂質)



1~4 柱穴内一括出土 5.6.8~12 P-32 (土器溜) 出土
 7.D-4 (土器) 出土 13~17.25 P-29 (土器溜) 出土
 18~20 H-2 柱穴内出土 21.22 H-5 柱穴内出土 23.
 I区V字溝A土層出土 24. II区V字溝底出土 26. P-29出土

第16図 中世遺構内出土遺物実測図

(5) その他の中世遺構出土の遺物

1・2・3の坏・小皿の底面はすべて、ヘラ切り底であり、4のいわゆる黒色土器A類が伴う。2は煤の付着があり、灯明皿として使用されている。5~12の坏・小皿の底面には、ヘラ切り底と糸切底の両切りはなし技法があり、いわゆる黒色土器B類が伴う。7・8は高台付小皿・23は南宗の白磁碗口縁部片。以上の遺物は土師器坏・皿の底面切りはなし技法の推移・黒色土器の共伴関係・高台付小皿の形態・南宗白磁碗などからして平安中期から鎌倉前半期であろう。

13~20は手捏小皿。13・18は蓋、15・16は煤の付着があり、灯明皿か。21・22は全面にロクロ痕を残す坏・24は明代の青磁碗片。25は備前壺底部片。これらの遺物は、手捏小皿、全面にロクロ痕を残す坏・備前壺・明代青磁碗などからして、室町後半期であろう。26は初鑄年1023年の天聖元宝宗銭で、手捏土師質小皿と共伴している。

IV まとめ

弥生時代の集落跡：守岡遺跡の堅穴住居跡を中心とする集落跡は、弥生時代終末期から古墳時代初期におよぶ時期を中心とし、集落としては大分平野周辺では屈指の規模をもつものである。大分平野周辺では、これと相似た規模、内容をもつ遺跡として、七瀬川をはさんで西方の雄城台遺跡がある。

また大分川左岸の台地末端では、近年尼ヶ城遺跡^②が調査されたが、これも守岡遺跡と対比しうる集落遺跡であった。大分平野周辺でのこうした集落跡は弥生時代終末期においても、周辺の沖積地および50~60mの比高を有する独立丘陵ないし台地末端に、きわめて限定された形で分布しており、この地域の文化のあり方を考えるうえで興味深い。

個々の集落の構造については、未調査地区を多く残し、未だ言及する段階でないが、総じてこれらの集落跡には、明確な墓地の遺構が検出されていない。この点は近年大分県南部の大野川流域の相つぐ弥生時代集落の調査の中でも指摘されることである。今後この地域での集落跡に伴う墓制の調査は大きな課題であろう。

なお守岡遺跡、雄城台遺跡、尼ヶ城遺跡とともに住居跡から後漢鏡片を出土していることも注目される。住居跡の中からの後漢鏡片の出土は、大野川流域の松木遺跡^④、二本木遺跡^⑤ (大野郡大野町)、小園遺跡^⑥ (竹田市菅生) などで報ぜられており、大分川下流域と大野川流域をふくむ広汎な集落間の関係を考察するうえで興味深い。

なお今回の調査では、堅穴住居跡の形態と機能の分化の問題、おびただしい焼土の成因、第19号住居跡に集積された土器群のもつ意味、弥生時代終末期から古式土師器の時期におよぶ土器の編年的考察等について多くの興味深い資料をえた。これらの解明を本報告の作業で果したい。

中世の遺構：守岡遺跡の中世遺構は、発掘区のはほぼ全域にわたって弥生時代堅穴住居跡と重複して検出された。主軸をほぼ東西・南北に直交させて並ぶ掘立柱建物とこれを取りまき、あるいは交錯して走るV字溝で形成されている。遺跡の立地と考えあわせ中世の館あるいは堡壘を思わせる。「豊後国志」には守岡堡の名がみえるので戦国末期の堡壘の遺構である可能性がたつ、遺物の主体が室町末期に比定されていることとも符合する。

ただこの遺跡の中世遺物には鎌倉時代にさかのぼる土師質土器のグループがある。この台地の一角には曲石仏 (鎌倉時代・県指定史跡) があり、石仏を中心とする中世寺院の存在が想定される。この寺に伴う神社等の遺構が台地上に存在することは十分に考えられる。鎌倉時代の遺構が明確になれば、この石仏との関係も解明しうるものと思われる。今後の調査に挨ちたい。

(注) ① 「日本考古学年報」

② 昭和52年大分市教育委員会が調査

③ ④ ⑤ ⑥

「大野原台の遺跡I~III」 (大野町教育委員会 昭和51年~53年)

「菅生台地の遺跡I~IV」 (竹田市教育委員会 昭和51年~53年)

「萩台地の遺跡I~III」 (萩町教育委員会 昭和51年~53年)

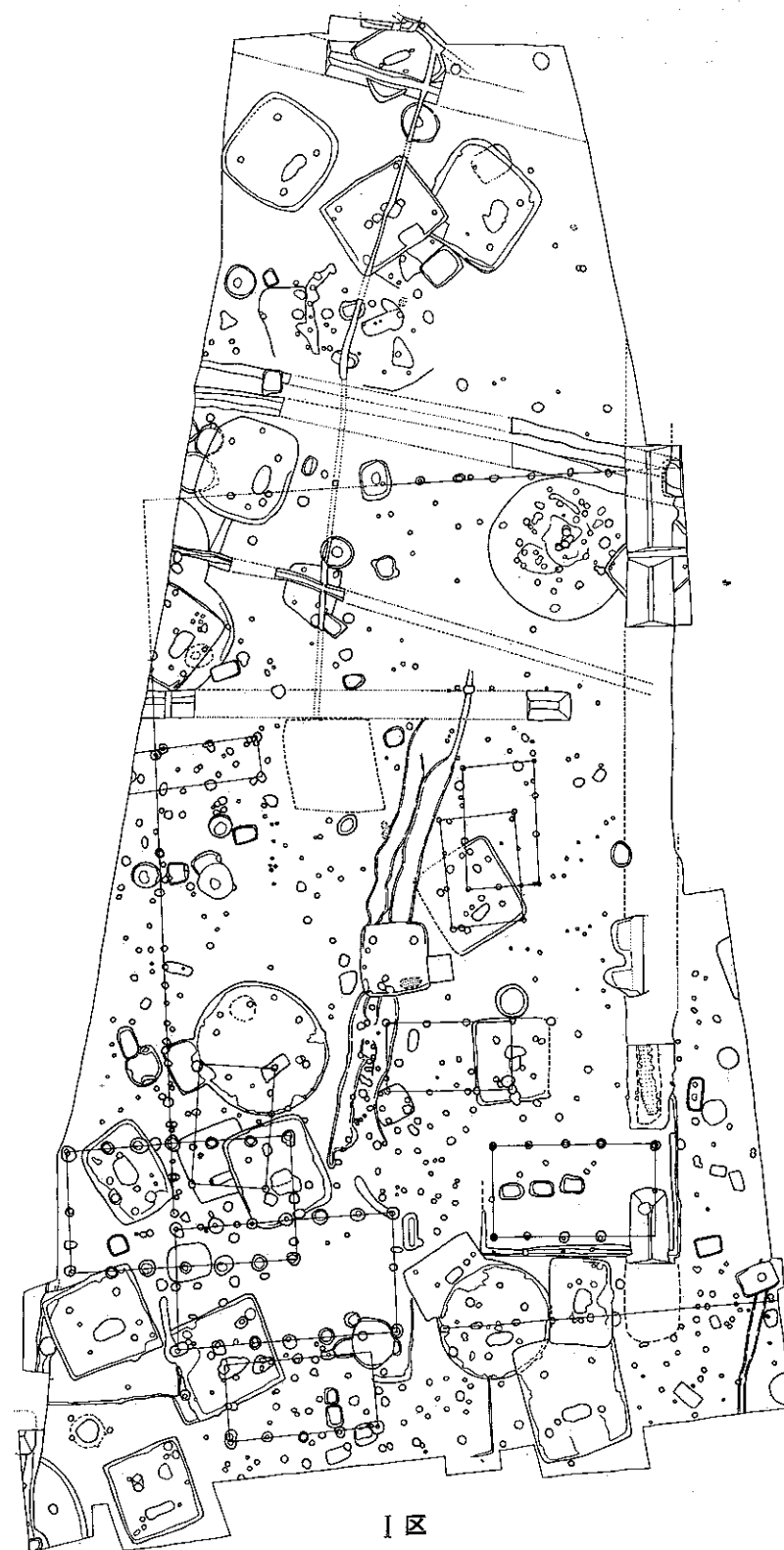
「二本木遺跡緊急発掘調査概」 (大野町教育委員会 昭和52年)

守岡遺跡発掘全測図



0 5 10 15 20m

II区



I区